

心理学における質的研究の方法 ——インタビュー法と自由記述法のプロトコル解釈——

Qualitative Approach in Psychology: Protocol Interpretations of Ethnographic Interviews and Free Descriptions in Cross-Cultural Context

中 村 俊 哉

(Shun-ya NAKAMURA)

福岡教育大学 教育学部 心理科

(1998年9月10日受理)

We reviewed qualitative approaches, for example, ethnography, interviewing, lifehistory, ethnomethodology, in psychology and related areas. We focused on the importance of the analysis of dialogue itself, and the importance of our interpretation of the interpretations of informants. We discuss quantitative and qualitative research on cross-cultural contacts of Korean Middle School students, business people in Singapore, and overseas students in Japan. Overall, we have made interpretations on these findings and protocols.

Key Words: Interview, Culture, Asia, Overseas student, Emic, Indegenous, Dialogue, Splitting, Contain

1. 問 題

本稿では、心理学と近接領域における質的研究の流れを振り返り、その記述方法と分析方法について検討し、その対話性を明らかにしたい。質的研究は、量的研究という言葉に対応するものとしてある。20世紀の心理学、社会学は、客観的、数量的な普遍性を求めてきた。これに対する反省が、質的研究の原動力になっている。(Denzin & Lincoln 1994)

(1) 質的研究

ここでとり上げる質的研究は、文化接触のテーマに関わるものであり、主にインタビュー法、エスノグラフィー、参与観察、事例、ライフヒストリー、ドキュメント分析などである。これらはすべて重なり合う概念である。情報提供者からいろいろな話、体験を聴き、またその文化、社会の背景、意味の文脈について知るにより、さまざまな現象の理解を深めるものである。臨床的な面接においても、文化の接触、混合と葛藤に気づくことが多い。しかし、心理療法は人を援助するのが目的である。文化接触の研究としては、臨床を参考としつつも、そこから少し離れて、取材としてのインタビュー法や自由記述法などを重視して進めたい。

(2) インタビューとエスノグラフィー

文化人類学者ギアツ (1973) は、「文化の解釈学」において、モロッコにおけるエスノグラフィー (ユダヤ人、ベルベル人、フランス人の解釈のズレ) の例などを示し、「エスノグラフィーとは厚い記述 (thick description) をする事である」とした。「エスノグラフィーは、ある人たちがやっていることについての、彼ら自らの解釈に関する、我々自身の解釈である」「そして目的は人間の対話の世界の拡大にある」という。

クリフォード (1986) は「文化を書く」において、「エスノグラフィーは、一つの新しく生まれた学際現象である」とした (p4)。文化人類学のみならず、古くはシカゴ学派の社会学におけるストリートカルチャーの研究に用いられ、80年代以降は、エスノメソドロジーなどの影響のもとに、スクール・エスノグラフィーなどに用いられるようになった。エスノグラフィーのエスノは、社会の成員といった意味である。日本ではこれを民族誌と訳してきた。佐藤 (1984) は、エスノグラフィーは「それを作成するもの (エスノグラファー) がその対象となる集団 (インフォーマント) の持つ文化に接触して体験するカルチャーショックの記録だ」としている (p17)。参与観察というフィー

ルドワークの技法を使いながら、語り手（インフォーマント）の解釈過程を観察し、ある事象と、その社会的文脈について理解を深めてゆく。そのフィールドノートと、様々な歴史、社会的な資料とにより、文化を書くことになる。

マリノフスキー日記に見られるように、エスノグラフィーは、実際は、フォーマル、インフォーマルなインタビュー（取材面接）の積み重ねである。インタビューは、一対一の対面式の言葉を交わす方法が主であるが、グループで行う方法、郵送法、記述式の質問、電話で行う調査などもある。インタビューには、標準化されたもの、半構造化されたもの、構造化されたものがある。数分の短いものから、長い時間かけるもの、何度も行う、例えばライフヒストリーのインタビューまである（ラングネス&フランク 1981）。構造化されないインタビューは、In-depth なインタビューという。

インタビュー、ライフヒストリーをつかった研究としては、古くは、ルター、ガンディーなどを扱ったエリクソンや、革命中国や広島体験を扱ったリフトン（1961, 1967）がある。日本では箕浦（1991）、奥田、田島（1991）、鈴木一代、藤原喜悦（1992, 1994, 1995）、福岡（1993）、高（1996）、浅野（1997）がある。

ドキュメント分析としては、帰国子女の自分史を分析した星野命（1983）などがある。

異文化滞在中の自己の主観的感情の起伏を記述、分析することを意図的に行ったのは、ポール・リースマンで、「訓練された内省（disciplined introspection）」という手法を用いた。これを、内省的民族誌とよぶ。

（3）対象の拡大とインディジナスな心理学

エスノグラフィーは、異文化、未開社会に長期間滞在して、生活をともにして文化を観察し、記録してきた時代を経て、より複雑な都市の文化やサブカルチャーに対象を広げてきた。

人間の心理、精神に関する研究は、その国や文化圏に共有される議論から自由であることはない。ハーバーマス（1990）のいう公共圏は、総合雑誌文化や出版物が流通する範囲ともいえる。香港、台湾、中国などの中国語圏、日本のテレビ番組が大量に流通している東アジア圏、インド；パキスタン、イランの英語圏などがあるとされる（リー、ガオンカル、酒井 1998）。リーらは、客観性の名の下に、どの文化圏でも同じような概念を用い、普遍性を求めようとしている社会科学に対し、

「牙を抜かれている」として批判し、それぞれの公共圏により独自の概念で研究をするべきだとする。彼らはカルチュラルスタディーズという新しい領域を生み出してきた。現地生まれの研究者が、祖国の文化の研究をするといった現象を歓迎し、これをインディジナスな研究者と呼ぶ。

心理学においても、アメリカで発見された様々な法則が、日本において当てはまらないということが多くみられ、現地における Emic な心理学が求められている。これをインディジナスな心理学という。アメリカ中心の、普遍的な法則を求める社会心理学の限界が指摘され、文化心理学という新しい領域が提唱されている。これらの事情は柏木、北山、東（1997）、Kim&Yamaguchi（1994）などにくわしい。

心理学においては、方法としてのエスノグラフィーと、文化に特有な Emic な研究へという対象の拡大が起こっているとともに、研究の内容も、日常性との往復が求められている。佐伯（1986）は「おもしろくない論文」が多い理由として、「おもしろさが成長する前に、見る目のない評価者の揚げ足とりの批判にさらされて、あっさり葬り去られる」ということがあること、「闘う相手がおらず、従来の流れに対し、反逆し、どんでん返しを食らわせる研究」が少ないこと、「研究者自身がおもしろいと思っていない」ことなどをあげた。彼は、日常性の実感と学問領域の専門性との往復運動が必要だとし、研究を日常語で読みかえ、比喻で捉えることを勧める。「動機づけ」を「やる気」と読みかえ、「帰属」を「せいにすること」「おかげさま」と言い換えることで、それぞれの理論が扱えない側面が見えるとする。人間を扱う学問が、現実社会の日常性と往復運動できるかどうか、現実社会に役に立つような見通しを生むことができるかということである。例えば、異文化間心理学は、文化接触における葛藤、文化ショック、不適応、文化変容などの解明、差別、民族間紛争、暴動、自文化中心主義などの解決に見通しを与えることができるのか。筆者らは、こうした新しい領域にむかう心理学研究が必要であると考ええる。

（4）対話性

本稿で主張するのは、質的研究をする際に、インタビューやエスノグラフィーで聴いたことを「現実」としてみる「リアリズム」のメタ理論に立つのではなく、「対話」として見るメタ理論に立つべきである、ということである。

クリフォードは、文化人類学の領域における内省的民族誌の動きを紹介する (p22)。「語るのは誰か、書くのは誰か、いつ、どこで、誰と一緒に、あるいは誰に対して、また、どのような制度的制約や歴史的制約のもとで書かれたのか、話されたのか」などをはっきりさせることが重要である。クリフォードによると、マリノフスキーの時代から60年までの伝統的民族誌は、民族誌家の主観性を排除して客観的に記述された。しかし、60年代以降、様々な自己内省的フィールドワーク報告では「あるがまま」に感情的な動きを書き始めた。そして、マリノフスキーの、マイル島日記、トロブリアンド島日記が出版され (1967)、「人々の前にリング箱をひっくり返して」見せた。クリフォードは、文化とは常に関係性そのものであり、主体と主体との「間」に存在してきたコミュニケーションの過程の碑文であるとする。

ラングネスら (1981) は、ライフヒストリーにおいても、対話における理解力が成功を左右するするという。そこでは、より攻撃的な質問を混ぜるなど、様々な試みがなされている。分析においては、ライフヒストリーが共同制作的行為であることを忘れないことを強調する。

(5) 対話のレベル

筆者は、質問紙調査も、それに含まれる自由記述法も、「対話」としてみることが出来ると考える。匿名の自由記述においては、一定の枠の中ではあるが、様々な体験や感情が語られる。それは、顔も知らない調査者に対して語りかけられている。

取材としてのインタビューでは、テープに残すことができるため、まさにその対話性が明らかに見て取れる。インタビューは、「すでにある何か」が語られたものではない。対話によって作り出されるものである。すっかり忘れていたことでも、対話によって、記憶の中から思い出されることも多くある。ついさっきまでそう思わなかったことを、新たに話し出すこともある。インタビューにおける対話は、自分、自己全体を表現する試みであり、テキスト化 (Textualization) である。

日常的な事例 (例えば留学生ならば、大学の事務局や、行政機関、相談機関が見聞きするトラブルなど) からは、別の関係が浮かび上がってくる。日常的事例には、多くの場合、異なる文化同士のすれ違い、ズレ、葛藤、驚きの体験が描かれる。これをまとめたものは、ある解釈のもとにおかれ、トラブルから学ぶための前例として機能している。一方で臨床的な事例は、セラピストとの対話とし

て成立する。クライアントの語りにいかに共感し、解釈するかによって、その流れは大きく変わるし、クライアントの無意識と、セラピストの無意識も影響しあっている。「連想」する内容は、相手との関係の中から生成する。夢も、箱庭も、セラピストとの関係の中で出てくるとも言える。転移を用いる心理療法の流れは、内省的フィールドワーク報告に通じるものがある。

本稿では、このように3つのレベルの対話 (質問紙と自由記述、取材インタビュー、日常および臨床的事例) を見てゆきたい。対話の中で、何が本質的なテーマとして現れているか、また対話によっていかに (聞き手も、語り手も) 解釈 (物語) をずらしてみることが出来るか、ということに注目したい。

2. 質的研究の記述方法

(1) インタビュー法の記述

エスノグラフィーやライフヒストリーも含め、インタビュー法における対話を重視するために、録音テープのプロトコルが重要である。プロトコル記載が、なぜ報告者のまとめた記録よりも優るのであろうか。それは、反証可能性の提供にあると考える。また、対話そのものの解釈を、公共の場で検討し合うために不可欠である。そのプロトコルから、異なる解釈が生まれることが可能である。その解釈の妥当性は、もっともらしさ (Plausibility) の直観 (佐伯) であり、整合性である。

具体例として、筆者が1997年にシンガポールにおける日本人の文化接触体験を調査をしたときの、20代の日系現地法人の女性日本人社員との、あるレストランでのインタビューの会話 (部分) を引用する。左の数字は、通し番号。全体は約1時間である。[] は筆者の注釈、() 内は沈黙 (食事中) の秒数、・・・は文章中の間の時間で、1秒につき・とした。// は重なる部分を示す。この種の記号は、サックスの会話分析の手法を取り入れたもの (好井1992など) で、広範囲に広まっている方法である。

[最初に、シンガポールの会社に就職するに到った経緯、会社の様子、シンガポール人の特性、メイドの話が続く]

12 [マダム] はいい人。あまりびっくりしない、ギャップのない人。でも、こっちの人は、・・・なんていったらいいのかなあ、とにかく結構ね

驚いちゃうんです。

- 13 ……あと、中国人とかね、…すごい白人を嫌っている、白人を嫌っている中国人とかも多いんですよ。
- 14 ……なんかね、レッドヘアなんとかとか言って。赤毛のなんとかと言ってバカにした呼び方があって。
- 15 (11秒) (あなたのお友達?) え? 少しうわさに聞いただけだから余り知らないんだけど。でもうちの会社の同僚にもね、あの若い、26-7の女の子がいて、その子はお金を運用しているからすごいお金も持っていて。
- 16 その子、私たちには全然悪い人じゃないんだけど、まあいわゆる典型的なシンガポール人だね。白人のことを、例えばね、まー肌の色も違うし、髪の毛の色もあまりに違うからね、とくに文化も違うし、あの一だから日本人よりもっとね、私たちに対しては、馴染みにくいみたいなことを言うの、彼女はね。
- 17 だから日本人はね、髪、見た目もそんなに違わないし、やっぱり文化もあるていど共通するところが多いからとうまいことを言うけれど。彼女たちはね中国人は中国人が一番としか思っていないですよ (笑)。ほんとに。
- 18 (18秒) (あーやっぱり中国人が一番という考えがあるみたいですか?) 絶対ある。(シンガポール人が一番というのではなくて、中国人…) でもやっぱりシンガポール人は、中国にいる中国人とは、…あの、格が違うのよとは思っていると思う。(あー) ま、こっちにしてみりゃね、つまないことですけどね。所詮中国人じゃん。
- 19 (4秒) こっちの人って見栄ってすごく大事だから。(中略)

[この後、シンガポール人の見栄、規制の多さ、遊びを知らないこと、自分がたくましくなったことが続き、政府がディーラーの試験方法を急に変えたという話、カルチャーショックの話、戦争のことを何も知らないという話、職場のマレー系の人の話となる]

- 65 彼はだから、あの一、まーひょうきんだし、なんてったって運用成績がすごくいいんですよ。だから私、マレーシア人の人たちに対しては、全然中国人に対する偏見とか、なにもない。
- 67 マレーシアに旅行いっぱい行ったけど、いつも楽しいことばかりで、いい思い、親切にしてもらった思い出とか、ホテルに泊まってもね、スタッフの人がちゃんとしているいい思い出と

かしかないから。

- 68 こっちなんか、ホテルとかに泊まったとしたら、何しに来たじゃないけど。そういうような顔をしているような…。もちろん、最近は改善してきたけど。それでも、いいホテルでも今だにむすとして受け付けやるような奴もいるし。
- 69 (11秒) (あなたがみる範囲で、マレー系の人と中国系の人とは完全にとけ込んでやっていますか) ううん、とけ込んでいるとは思わない。だってね、うちのマレーシア人の人は、あんまり色が黒くないんですよ。私より少し黒いぐらいね。だから、うちの中国人の子とかは、彼には言わないけど、私には、あの一彼はさー余り色が黒くないからね、ベターなマレーシア人なんだよとかね。(中略)

[この後、メイドに対する差別、戦争の話が進む]

「エスノグラフィーは、ある人たちがやっていることについての、彼ら自らの解釈に関する、我々自身の解釈である」といったギアツの言葉は重要性である。インタビューでは、隠された「現実」が聞き出されるのではなく、対話によって「心の真実」が生成されるのである。対話の中で、何が起きているかを解釈すること、解釈のズレ、異なる意味の網目を理解することが大切である。

対話の質によって、人はいわば退行する。彼女が若い女性であったこと、レストランでの取材であることで、思っていることがそのまま口に出て来ていると思われる。そして、ここでは白人と中国人の分割、中国人とマレー人の分割、日本人と中国人の分割が語られる。17や68では中国人(華人)への反感や不満がみられ、筆者は多少のエスノセントリズムをそこに感じた。

このインタビューでは、筆者からいくつかの情報を出し、それに対する反応も見ている。この手法は、単なる聞き手ではなく、積極的にやりとりをして解釈をずらすものである。

彼女との対話から「文化のズレの体験にひきつづき、集団間に分割(Splitting)がおり、分割された相手の方に悪い感情を投げ入れる」(仮説)という心の仕組みが、様々なところで起きていること、さらに、これがストレス解消の仕組みでもあるということが分かる。

(2) その他の記載法

1) 対話形式でないインタビュー

インタビューを行いながら、対話として記載し

ないものも多く見られる。江崎、森口 (1988) の『「在日」外国人』は、質問部分のない逐語録である。岩男、萩原 (1987) も、対話として記載されていない。これでは、やりとりの質が分からないといえる。

2) エスノメソドロロジーの記述方法

西阪 (1992) によると、エスノメソドロロジーの試みとは、行為への社会学的説明をつけ加えるだけでなく、その社会学的説明そのものがどうやってなされるかを分析することである。会話分析を取り入れたのはサックスで、電話相談のやりとりで、カテゴリーがどう用いられるかを研究した。

エスノメソドロロジーの扱う対象の広さを示すためにも、好井 (1994) の示したある部落差別事件を契機として開かれる事実確認会の会話分析を引用する (p142-145)

1 A: 全然情けのうもなんともないんか: ほい
 でおそういうことをへきで言って: そういう
 ことをこの場で言うて: : 《被差別部落の、差別を受けて: 嫌になつる思いをしとる者》を
 目の前にして: (中略)

16 [15.0]

17 A: あんたのようなう: そういう態度のもとに何人もの高校生が自殺していきよるんぞ:
 うちの子供らはみーんなそれでころされていきよるん: [あぁごめんごめん部落民じゃ思いよったがちごうとった勘違いだった]: そんなもんか:
 この同和教育いうのは: そんなもので: うちの者は: そんなつまらんことで命落としよるんか (12.0) あんた何なんね (中略)

35 C: [被差別部落の人たちです]

36 A: [被差別部落の人たち] とは誰のことなん (中略)

ここで使われている記号は、左の数字は行の通し番号、: は発話間の短い間 (ま) を示す。(数字) は同一発話内の沈黙で、秒数。[数字] は会話間の沈黙で、カッコ内は秒数。《 》[] は、カテゴリーの種類を示しているという。好井は、生活者のカテゴリーと解説者のカテゴリーとを比較して分析する。

3) 認識人類学

文化人類学の中でも、文化モデルやスキーマという心理的な部分を扱う認識人類学が生まれている (ダンドラーデとストラウス1992)。次に引用するハークネスら (1992) は、36カップルの親のインタビューと日誌から、親になるということの

学習に、文化モデル (Cultural Model) が力を持つとし、アメリカにおけるステージ (Stage) と、独立 (Independence) という文化モデルにより、文化知 (Cultural Knowledge) が構築されるとする。

キャシー (12ヵ月、妹)

父: それについても彼女は予想がつかない行動をするんだ。車のシートに載せるでしょ、彼女がピンと伸びたままベルトを締めさせてくれないか。

母: 彼女は他にいったいどんなことをやる?

父: うーん、彼女を車に乗せて、買い物に行くときは、彼女は乗ると思う。そして、帰るときに、車のシートに載せるときは。

母: 悪くなっているのね。(以下省略, 原文英語)

認識人類学の手法でエスノグラフィーをまとめた有川 (1993, 1996) は、日本におけるインドネシア人と日本人の関係、先輩後輩関係などを分析した。

4) 事例

ロサンゼルス日本人家族を継続的に面接した箕浦 (1991) にも、対話を引用した部分はあるが、多くは事例のまとめである。年令、滞在年数が付記される。発達研究における観察記録としての事例は、例えば秦野、やまだ (1998) などがある。そこでは、年、月、日齢までが記載される。

3. 在日朝鮮人中学生の体験の分析

次にとり上げるのは、質問紙調査と、そこに付随した自由記述、さらにインタビューという3つの形式を含んだ、在日朝鮮人中学校での調査の経験である。ここから、対話の発見的な意味の大きさを明らかにしたい。

1990年11月、複数の朝鮮人中学校で、どのような文化接触体験をしているかを日本語による質問紙により調査した。量的部分の統計的分析結果と自由記述部分の結果を、教育心理学会 (上越教育大) で報告、インタビュー部分と合わせて、安田生命社会事業団の報告書 (中村、慎、平、川本、高田、横山 1992) とした。さらに、1994年、量的部分を中心に教育心理学研究の論文とした。対象者は、167名の中学1、2年生であった。

(1) 統計的な結果

家で話している言語は、日本語だけの人と、日

本語と朝鮮語両方の人がほぼ同じぐらいで、朝鮮語だけという人が居なかった。日本人の親友は、72%の人があるとした。日常的に日本人と接する機会は、48%の人がある。「いやな思い」をした人は30%、日本人でないことで「良い思い」をしたという経験は25%であった。「日本人ともっと深く付き合いたい」は、そう思う人が半数近くで、「日本人の友人がたくさん欲しい」も同様であった。日本人イメージについては、因子分析から2因子を取り出した。数量化1類により、接触経験の諸変数から「意識」の諸変数の個人差の説明を試みたところ、そのいくつかに説明力があつた。例えば「日本人と深く付き合いたい」は、「親友の存在」「良い思いの経験」がある人ほど高くなり、説明力を持っていた ($r=0.50$)。

(2) 自由記述からの結果

まず、日本人と日常的に接する場合は、学習塾、英語塾、スイミング、スポーツクラブ等であることが分かった。「いやな思い」には、「仲間外れ」「朝鮮人と知られた途端文通をやめられた」などの差別、「臭い」「朝鮮人の癖に」などの言語的攻撃、雪や水をかけられる身体的攻撃、定期券の割引がないなどの制度が上げられた。「良い思い」では、2ヵ国、3ヵ国語を使える事で「ほめられた」「うらやましがられた」が多く、女生徒の「チマチョゴリ(民族衣装)をほめられた」もあった。これらの「エスニックな良い体験」が、日本人との交流意欲、異文化態度を高めた(仮説)と考えられた。

質問紙では、この他「もし私が」「父は」などに引き続く文章完成法をいくつか書いてもらった。

(3) インタビューからの結果

筆者らは報告書(1992)にはインタビューの「まとめ」3ケースを掲載したが、論文には掲載しなかった。これは、当時の方法論的な限界である。質的研究に重きをおかない当時の風潮ということもできるし、あるいは、インタビューの数が少なかったことから来るものもあった。しかし、現在の筆者らの方法論からは、少ないインタビューでも十分にプロトコル掲載の意義があると考えられる。

(4) まとめと対話の比較

報告書に掲載した「まとめ」た文章と、インタビューの対話そのものを紹介する。まとめでは、ある解釈によって対話性を切り、「現実」の記載の形を取っている。しかし対話のプロトコルから

は、より豊富な情報が分かるのである。

A君のインタビューの「まとめ」

A君(朝鮮籍, 13歳)は、小学校6年まで日本学校にいたが、登校拒否気味だったこともあり転入し、暖かく受けてもらった自覚がある。小学校2年まで自分は日本人と錯覚していた。父や母から聞かされ、ショックだったという。日本学校にいたことから、日本人の友人は多い。小学校4年の時「ぼくが朝鮮人だったらどうする?」と何気なく聞いてみたが「親友だから絶対に捨てない」といわれた経緯がある。表札、診察カードなどには日本名が書いてあるという。将来は貿易商になりたいという。

A君のインタビューのプロトコル

実施, 1991年11月。インタビューアーは3人であった。質問は主に筆者と女性共同研究者が行った。[]は注釈。質問は()である。通し番号は、適当なまとまりで区切って付した。

[はじめに、この学校に編入した経緯を聞いた]
(中略)

- 3 (移ろうと思ったきっかけは) よくわかんないんですが、うちのお父さんとお母さんが絶対行けて。最初不安でしたけど。入って3日もしたら、みんな。すぐ慣れて。
- 4 (言葉は両方ですね) はい。(すぐ慣れました? 日本語の授業だけだったでしょ) それは、編入生用の授業に国語[朝鮮語]の時間だけ[出た]。そこで1, 2学期を過ごし、3学期から皆と同じ授業に出るようになりました。そのあいだ不便は少しありましたが、みんなであうまくフォローしてくれて。
- 5 (ここでの授業は朝鮮語?) はい、そうです。日本語の時間だけ日本語をしゃべります。(週に) 週5回かな。やっぱり日本で生活する以上は知らないと。
- 6 (英語もあるのに大変ね) そうですね、でも、日本語の場合は日常的に僕たち使っていますからね。
- 7 (親しい日本の友人いらっしゃる) [質問紙の方に] 書いていますね) はい、います。日本学校にいましたので。
- 8 (その頃の友達と会ったり) あります、たまに遊びにいきます。(おうちが近い?) はい。
- 9 (転校するときややじゃなかった? そういうお友達と) でも、新しい友達も増えると思ったから。
- 10 (日本の小学校にいたとき朝鮮の方のお友達はいらした?) その頃は、幼稚園の頃の

- 友達しか。あとは親戚、親類の友達で一人いました。
- 11 (そんなたくさんは) いませんでした。(日本の友達が多かったのね) そうです。
- 12 (入ってきて民族の同じ友だちいっぱい出来てどんな感じ?) 最初は実感なかったです。でもそれが普通になってきて。
- 13 日本学校と時間の過ごし方が違うんですね。日本学校だと勉強時間だと誰もなんにもしゃべれないでしょ。分んないのかって聞いたら答えてくれるんですけど。
- 14 この場合は、ぼくが聞く前に、ここ分かるかと向こうから尋ねてくれるんで、その点助かりました。(先生とか友達) はい。
- 15 (家族ぐるみで付き合っている[日本人の]家族あるんですね) はい。(ときどき)と言うよりしょっちゅうですね。よく来ますね。(運動会にもよく) はい。
- 16 (韓国朝鮮には行った事は) ないです(両親は) ない。(ご両親の学校は) 父が、C県の普通の。母がA市の朝鮮学校、高校。
- 17 (じゃあ、お母さんが朝鮮学校の良さを) でも、うちのお父さん、二十歳ぐらいのときD社に入社しまして。朝鮮語をよくしゃべりました。
- 18 (小さいときから両方?) 小さいときはあんまりしゃべりませんでしたね。この学校入ってからちょくちょく。
- 19 (日本語でしゃべりにくいとはどうぞ)
- 20 (将来はどういう方向) 余りよくは考えていませんけど、貿易商とか。(国[との貿易]を考えている) 一応。
- 21 (言葉[を生かせる]) 三カ国語しゃべれますから。それから、語学というのをいっぱいやって、いろんな国の言葉をしゃべって旅行できたらいいなと思っています。
- 22 (高校なんか。大学は) 大学は日本の大学に行こうと思っています。ただし高校までは、友達がいちばん出来るのは高校ですからね。高校まではちゃんとこの学校で。
- 23 (大学のための準備なんかは?) そうですね。一応。そろそろ塾へ行きだそうかと。日本の学校からこっちに入ってきたときもレベルが根本的に違うものがあったんで。塾行って慣らさないと。いきなりやり始めたんじゃ大変かなと。
- 24 (高校は[この学校に行きたいのは]仲間を増やしておきたいと?) そうですね。友達の和という感じ。人脈はあった方が自分が生きてゆくためにも大切と。
- 25 (朝鮮学校に通っている事でよい面悪い面は?) そうですね、日本の人たちからみれば僕ら外国人です。少しくらい言われても当たり前だと思っ、いますから。それほど考えていません。
- 26 (どう) だ日本人とちょっと喧嘩しちゃった。朝鮮人はおるかって大きい声で言われたものでつかつと。
- 27 たまたま駅を歩いていたら声かけられ、学校どこかと聞かれて朝鮮学校だと答えたらややこしくなってしまう。(中略)
- 33 (じぶんが日本人とは違うなと思い始めたのは幾つぐらい、自分の家が朝鮮人の・・) ぼくは小学校2年生のころまでで日本人だと思っていました。その前に幼稚園行っていたんですけど、国際的な何かあるのかなと思って。自分は日本人だと錯覚していた。
- 34 小学校2年の時父や母から聞かされ、そのときちょっとはショックだったんですね。みんなが言うような誇りとかそういうのは余り感じないですけど。
- 35 周りの人とは、違うけど、それをうまくどうにか出来ないかな、応用しているような感じですよ。
- 36 (生まれ変わったら朝鮮で生まれたいと思うか、もし、ここで) 生まれ変わったとしても朝鮮であれ、どこであれ生まれたところを大切にします。
- 37 ([朝鮮だと] 周りの人も同じ民族だし。日本だところどころが理解してくれないとか。どっちがより自分には良い?) そうですね、簡単に言えば仲良くしたいですね。あんまり応用とかそういう言葉は使いたくないですけど。いちばん理想なのが、みんな一つの和になってというのが。
- 38 (国際的興味があるみたいですね、語学) 英語は正直いつて決して成績いいほうじゃないです。頑張りたい。(中略)
- 43 (大学は何学部、商学部とか) 好きな事やればいいですが。虫のいいはなしはないんで。
- 44 (小学校5年までの友達、彼らはあなたがここにきている事はどう思っているの?) 彼らのなかで僕がここ来ている事知っているのは半分いないかも知れない。学校の方は知っていると思うが。友達がまだよく分かっていないかも知れないですね。
- 45 (付き合っている人も) ほとんど知らないみたいです。知っているのもいて。でもあんまり(話はしない) そうですね、というより興味

- がないんじゃないですかね。そういう事に余り。
- 46 (転校するとき) E市の私立へ行くと。そんな中でも、朝鮮学校行くよって何人か親友に言いましたけど。
- 47 小学校4年の時、僕が朝鮮人だったらどうするとか何げなしに聞いてみた事がありますが、お前が朝鮮人でも親友だから捨てないって、みんないってくれました。
- 48 (小学校の時名前) うちのポストとかK [日本名] で、かっこしてA [朝鮮名] となっている。病院の診察カードもF [日本名] になっちゃうんです。
- 49 うちの父が [仕事名] をやっていまして仕事の関係で名前が朝鮮人だったらやばい場合があるんで、それでFという事になって。
- 50 (いままでFで) 転校してきたとき、自分の名前を朝鮮語でまだ書けませんか。漢字で書かなきゃいけないんですが漢字を忘れちゃって、その日だけ名前が変わっちゃったりして。(以下省略)

Bさんのインタビューの「まとめ」

Bさん(韓国籍, 13歳)は、小学校から朝鮮学校に在るが、保育園は朝鮮名で通い、「中国人なの?」と聞かれて「朝鮮人だよ」と答えていたという記憶がある。彼女には民族的同一性が早くからあると言える。日本人の友人は、英会話や文通でたくさんおり、町でチョゴリをほめられたり、文通相手から朝鮮語をいろいろ教えてといわれたり、自分のエスニシティを評価された体験を持つ。将来、カナダの大学に留学したいという。母は、Bさんの子も民族学校に入れさせたいと言っており、Bさんもそう思っている。これは、異文化の人と結婚してもだと言う。朝鮮人は暗いと思われているが、本当は明るいとか分かって欲しいという。

Bさんのインタビューのプロトコル

(中略)

- 12 (小さいうちから自分が韓国、お父さんお母さんは韓国籍で、朝鮮語を使っているから周りのうちと違うなと感じたのはいつ頃?) 小さいとき。自分がB [朝鮮名] だから、みんな中国人なの?とか保育園の友達がいったけど、自分が朝鮮人だということ余り分からなかったけど、朝鮮人だよって。(中略)
- 16 (韓国いつてみたい気持ちあるでしょ、大学はどのようにしたいと思っている?) 大学よりも、高校卒業したら留学したい。(どこに) カナダ。(中略)
- 19 (韓国に留学したいとかは?) ない。国には

遊びにゆくというか、ただ行くだけというか、一回行ってみたい。

- 20 (日本の人は私の国について理解していないと感じるときどういう時感じるか教えて) 暗いと思っているところ。よく日本の友達から、黒い服着ているから暗いと思ったといわれる。また悪口でもよくそう聞こえるから。それがちょっと、明るいんだよって感じ。
- 21 (本当の事を分かってない。でも文通したり、本当に仲良くなった人は分かってくれた?) うん。
- 22 (もし生まれ変わるとして、今、韓国籍で日本に生まれるのと、韓国に生まれるのは) そのまま。(もしそういう風に生まれてたらどう違ったかしら) 暮らしが。嫌気がさしていたと思うけど。[ここで朝鮮語で問答している]
- 23 「金日成主席の事を、もし朝鮮で生まれていたら、ここよりもっと身近なものに感じていたでしょうとの訳入」
- 24 (日本の学校に行っている人もいるでしょ、朝鮮人の人でも。行かないという事をどう思いますか?) あたしが。もし行ったら? [朝鮮語で補足。あなたがどう思うか]
- 25 こっちへ来たらいいと思う。だって、自分の国の学校で習わないと日本人になっちゃうし。そうになったら一生、自分の子どもにも日本学校にに入れるから、完全に日本人になっちゃうかもしれない。
- 26 (他の、ずっと先も知れないけど。他の文化の人と結婚しても良い、という質問に、どちらかと言うとそうと答えているけど) ええ(そしたら、あなたのお子さんは、二つの違う民族を持って生まれるでしょ。そしたら、伝えてゆきたい?) 朝鮮学校に在る。(なるほど)
- 27 (「もし私が」[という文章完成法]で、日本人だったら今の私はなかっただろうって書いてあるわね。もし日本人だったら) 完全日本人になっていて、朝鮮なんて変だと思っている。朝鮮なんて分からない、日本がいちばんいいと。
- 28 (逆に韓国に生まれていたら日本人の事どう思っていたと思う?) もう少し、他人じゃなくてみんなで力を合わせてやろうと。自分だけがお金を持っていたら資本主義じゃないで、みんな。(以下省略)

(5) コンテナモデル

これら全体から言えるのは、この質問紙調査自体が、日本人にとっては安心させる何かをもたら

したことである（実際、その後に日本の学生に報告書を読ませると、同じような反応が得られた）。つまり、在日の人たちが、日本人と接したいと思っていること、交流したいと思っていることがメッセージとして伝わった。「質問紙調査自体を、対話として試みるのが出来る」（仮説）。

次にインタビューから言えるのは、質問紙に現れないものが対話の中に現れるということである。

Aの中には、日本人から朝鮮人の悪いイメージを向けられるイメージがある。A-33では、自分が朝鮮人だと知ってショックだった経験が語られ、A-36は、共同研究者から「生まれ変わったらどの国籍になりたいか」という問い（アイデンティティをはかる指標となるもの）をされて、「どこであれ」と特定しなかった。A-47では、僕が朝鮮人だったらどうする、という問いを友人にしている。Aには日本人から「悪いものが向けられる」であろうというファンタジー、日本人の中にあるであろう「差別」の予想がある。しかし「捨てない」といわれたことによるファンタジーの「現実化」「中和化」がある。ここで、彼は安心を得ることが出来た。ピオンの言う、コンテインド・コンテイナーモデル（内容容器モデル）の「コンテイン」（包容）に相当する心理的な動きが見られる（中村 1989, 福本 1991）。「人が、何かの不安や葛藤や矛盾をコンテイナー（容器）に投げ入れ、さらにそれがうまく苦痛を和らげて、中和、解毒して返してくれるという体験をすると、人はその良いものを心に取り入れることが出来、安心が増大する」（仮説）。なお、Aは、このインタビューには、当然の事ながら、慎重な態度が見える。担任からの情報である不登校気味だったという話はA-3では出てこない。しかし、A-13, A-26, A-47などは、自発的な語りであり、内側から賦活してきたと思われる。

Bの12の言説からは、早いうちからの民族的なアイデンティティというものがあることを示している。B-24, B-25, B-26からはBの民族学校への強い共感を示している。ところが、B-27では、もし日本人だったら、という言説に関して、「完全日本人になっていて、朝鮮なんて変だと思っている」と差別的なファンタジーを自らに向ける。日本人だったら、このように思うだろう、それは仕方がない、という分割がある。Aも、A-25で「少しくらい言われても当たり前だと思う」という言い方で、耐えている。

さらに、このプロトコルからは、Bが韓国籍であることが低流したテーマになっている。これら

のことは、調査自体の目的ではなかったし、触れることはなかった。韓国籍であることは、カナダなどの外国に自由に行けることをも意味していた。ところが、質問者が「韓国」という言葉を使うのに、Bは朝鮮という言葉でしか答えないのが分かる。B-28では、韓国で生まれたら、という問いに対して、あきらかに社会主義国としての朝鮮に話題を変えて答えている。B-22では、やはり日本で生まれていたいことを暗に示し、B-23は朝鮮語で、キムイルソンが身近でないことを在日朝鮮人共同研究者に語る。このことは、日本人の聞き手には言えない何かを、朝鮮人研究者に言えたと考えられる。このことは、「相手がコンテインしてくれない予測のもとでは、相手に葛藤を投げ入れられない」（仮説）、ということの意味している。在日の生徒の中に、祖国の分裂と考え方の分割が深く入り込んでいる。対話の一つ一つに、この分割が影響してきていると解釈できる。

一方で、AがA-26で日本人との喧嘩などを発話できているのは、日本人の聞き手二人が、これらのことをコンテインし、理解してくれるという予測があるからである。「語り手は、聞き手に対して、自分を受け入れ、矛盾を分かってくれる存在として、期待をする傾向にある。これは、質問紙での自由記述でも見られることである」（仮説）。

エスニックなものを日本人に評価された体験が、交流への意欲と結びつく、という量的な結果は、実は、悪くみられると思っていた（ファンタジーしていた）のに、良く見られたという体験における、受けとめられ（コンテインされ）、解毒され、中和された経験であると解釈できる。

国籍の分割、差別の中和化（分割投影した差別イメージの解毒）などがプロトコルからは見て取れたが、量的研究部分では、仮説は既に調査前にできあがっている枠を超えられない。仮説検証の体裁をとるので、それと関係のないテーマをはきむ余地がないことになる。したがって、このように三重の水準を併用したことは、言説の多面性にふれる契機となったと言えよう。

4. 留学生の体験の分析

ここでは筆者らが行った留学生の質問紙調査と、自由記述のプロトコル、さらに留学生の様々な事例の三水準から、解釈を試みる。

(1) 留学生の心理学的研究

質問紙と自由記述を組み合わせた調査には、岩

男, 萩原 (1988 a, p158-165) による1985年の留学生調査がある。「日本で経験した不愉快な出来事」「愉快な出来事」「日本人はどのような外国人が好きか」への自由記述の内容分析である。岩男, 萩原 (1988 b) では, さらに様々な差別や偏見のエピソード, 「はっきりしない日本人」や, 「酒」にまつわる嫌な体験, 「大学」への不満など, 広範に記載されるが, 3つの質問をバラバラに分析しているので, ある人が他の項目でどう答えているかが分からない。井上, 伊藤 (1995) も, ベリーの概念によるキムの質問を用いた質問紙調査の結果と3つの「事例」(U字型の経過)を示したが対話としての記載ではない。

インタビュー例としては, 岩男, 萩原 (1978) は, 4人の留学生の対日イメージに焦点を当てたインタビュー, 岩男, 萩原 (1987) は, 帰国した留学生35名へのインタビューで, 岩男, 萩原 (1988 a) の第5章は, 一部をまとめたものである。文部省の留学生の割り振り方, 寮生活と, 日本人との接触の少なさ, 日本人の対人様式 (家にはあまりよばない) などが示されているが, これもインタビューは対話形式では示されていない。一方中村 (1997) は, シンガポールの元日本留学生のインタビューを対話形式で記した。

留学生について書かれたトラブル事例には, 例えば100のトラブル解決マニュアル調査研究グループ (1996) の「外国人留学生100のトラブル解決マニュアル」, 大橋ほか (1992) の「外国人留学生とのコミュニケーションハンドブック」, 高岡 (1996) の15の事例がある。留学生と接する人々の経験をまとめたものである。

留学生に関する臨床事例は, 高松 (1994) の6つの事例, 高松 (1995) の8つの事例, 矢永 (1994), 鈴木, 井上 (1994), 鈴木, 井上 (1996 a), 井上 (1997 a), 井上 (1997 b) などがある。これらでは, 孤立感, 被害感, 対人関係などがとりあげられ, ちょっとした事柄が重大になって行くプロセスや人間としての成長の過程が描かれる。

(2) 筆者らの留学生質問紙調査

ここでとり上げるのは, 次のような調査であった。

被験者 日本全国の18校の大学に通う留学生

調査時期 1994年10月から1995年5月にかけて実施した。調査用紙の配布は, 大学の留学生担当部を通しておこない, 無記名式で回収した。質問紙は, 日本語, 英語, 中国語, 韓国語で構成され, 希望する言語で応えてもらっ

た。

内容は,

- 1) 国籍 (表1), 民族, 性別, 滞日期间, 年齢
- 2) 日本人との友人関係の豊かさ
- 3) 自エスニシティに関わる肯定的, 否定的経験 (表3)
- 4) 親しい日本人による自エスニシティへの関心, 好意の認知 (表2)
- 5) 一般の日本人による自エスニシティへの関心, 好意の認知
- 6) 日本人との交流意図
- 7) 日本人イメージ
- 8) 異文化との交流意図

自由記述:

- 1 日本人との接触でよい思いをした経験
- 2 嫌な思いをした経験
- 3 民族的立場
- 4 意見

(3) 統計的な結果

アジア系の留学生に関しての統計的結果は, 山崎, 平, 中村, 横山 (1995) に報告した。本稿では, アジア系以外も含めたデータで報告する。

1 対象者

質問紙は, 留学生は男性340名, 女性207名で男性がやや多く, 平均年齢は, 28.8歳, 滞在期間は, 平均31.6ヵ月であった。自由記述部分は, 中国語, 韓国語, 英語の記述は日本語に翻訳して, 集約した。対象者の出身国別人数は, 表1の通りであった。

アジア系留学生の統計的な結果からは, 次のようなことが分かった。2) - 8) の各項目群について主成分分析を行い, 因子数を検討した後, 尺度項目の選定を行った。2), 4) - 6), 8) の回答については, 一次元構造が確認されたが, 3), 7) については, 2次元の構造であることが示唆された。3) は, 自エスニシティに関わる肯定的経験, 否定的経験の2因子で, 尺度としては, 2の「母国語が出来ること」が除外された。7) は, 親和性イメージ ($\alpha = .82$) の因子と, 信頼性イメージ ($\alpha = .75$) の因子となり, 尺度からは「親切だ - 不親切だ」が除外された。

対日, 対異文化態度形成因果モデルとして, パス解析を行った。パス解析の推定には, 重回帰分析を用いた。その結果, 「肯定的経験」から「親しい日本人による関心・好意の認知」と「一般の日本人による関心・好意の認知」に正のパスが

(パス計数0.41, 0.36), 「親しい日本人による関心・好意の認知」から「対日本交流意図」に正のパス (0.26) が, 「対日本交流意図」から「対異文化交流意図」へ正のパス (0.50) が見られた。また, 「否定的経験」から「親和性イメージ」に負のパス (-0.28) が, 同じく「否定的経験」から「信頼性イメージ」に負のパス (-0.27) が見られた。「一般の日本人による関心・好意の認知」からは, 「親和性イメージ」に正のパス (0.18) が見られた。

(4) 自由記述の分析

自由記述からは, エスニックな立場が, マレー系チャイニーズ, 中国系インドネシア人, ジャワ人, 華人, 台湾の中国人, 漢民族の台湾人, 台湾人, 上海人, 中国人の中の香港人等, 多様であることが分かった。国とエスニシティは異なることも多かった。エスニックな立場としては国, 地域(島), 言語文化, 宗教などが含まれており, その中で自分が大切と思った立場を答えていることが分かる。ここに紹介するプロトコルは, その一部で, 自分を多く語った記載である。つまり, 筆者らに対する対話としてとらえることが出来るものである。質問紙に含まれる自由記述の利点としては, サンプルの代表性があげられる。しかし, そちらの面は, 別の研究に譲り, ここでは事例として焦点を当ててみる。文章には, プロトコルナンバー, 年齢, 滞在年数, 国籍, 民族を付記したが, これらとプロトコルの内容の因果関係は想定していない。1は「よい思い」, 2は「いやな思

い」, 3は「民族的立場」, 4は「意見」である。

1) エスニックなよい体験

質問紙の結果と同じく, 「エスニックなものを肯定される経験は, よい体験となる」(仮説)。これも, 朝鮮人中学校で見たように, コンテインされ, 良いものとして返される経験とみる事が出来る。

例1 A大学 37才 男性 韓国 韓民族

1 韓国文化, 言語などを教えてといわれたとき(原文日本語)

例2 F大学 41才 女性 3年6ヵ月 台湾 台湾人

1 普通の日本人より1ヵ国語をしゃべれること

2 バイト先で嫌みを言われたこと(自分はちゃんとまじめに働いたつもりでしたが)

3 台湾人(原文日本語)

例3 E大学 34才男性 3年8ヵ月 韓国 韓民族

1 正月に韓国の伝統的な民族衣装である韓服を着て京都に行ったときに, 日本人とか他民族の人々より綺麗と言われてよかった。(原文日本語)

例4 B大学 33才男性 3年3ヵ月 中国 漢民族

1 勉強中で外国人として考え方や意見はよく聞いてくれ, 尊重してくれたことがよくある。アルバイト先で外国人留学生として, 2ヵ国以上の言葉が出来ることはよくほめ

表 1

国 籍	留学生
中 国	224
韓 国	67
台 湾	38
マレーシア	26
タ イ	25
インドネシア	24
米 国	16
バングラディシュ	12
フィリピン	11
ブラジル	8
ミャンマー	6
イ ラ ン	6
ロ シ ア	6
その他アジア州	29
その他欧州	15
その他米, 大洋州	17
アフリカ州	17

表 2

身近なまたは一般の日本人からのエスニシティに対する関心好意の認知 Q1-2 (1~5の5件法)

	身近な日本人から		一般の日本人から	
	平均	SD	平均	SD
5 母国訪問希望	4.29	0.83	3.66	1.01
1 伝統, 芸術への関心	3.81	1.03	3.26	1.09
6 民族に好意的感情	3.80	0.94	3.21	0.93
4 民族の政治経済	3.64	1.11	3.26	1.08
3 歴史に関心	3.58	1.17	3.08	1.17
9 将来に関心期待	3.49	1.06	3.08	1.02
2 習慣を理解尊重	3.46	1.08	2.78	1.02
7 優越感	3.17	1.09	3.28	1.06
8 劣等感	2.27	0.96	2.29	0.96

表 3

エスニシティ肯定経験 Q 4-1 (5件法)

	平均	SD
6 民族料理	3.30	0.94
8 文化習慣の話題	2.97	0.84
2 母語が出来ること	2.52	1.09
12 芸術	2.62	0.91
10 民族の有名人	2.46	1.01
4 衣装	2.17	1.09

エスニシティ否定経験 Q 4-2 (5件法)

	平均	SD
3 母語への偏見	2.11	1.08
1 けなされ	1.99	0.87
5 アパート	1.75	1.05
13 習慣トラブル	1.87	0.88
7 アルバイト賃金	1.58	0.96
9 意地悪	1.66	0.89
11 お金をだまされ	1.20	0.50

られた。自分の民族の習慣と文化はよくほめられている。

2 [空欄]

3 中国人

4 意見 このアンケートの結果は発表する予定ですか。またその結果に基づいてどんな建設的なご意見か教えてください。このままではおられないでしょう。(原文日本語)

例5 E大学 34才 女性 2年 タイ

- 1 タイ料理はしられている。彼らのために私がタイ料理を作ったとき、彼らは本当によろこんで味わっていた。
- 2 ときどき、日本の新聞は、タイの悪い側面だけを報道する。例えば、売春。何人かの日本人は、すべてのタイの女性が、そのようにお金を欲していると考えていた。彼らは、我々と接しなければならないとき、我々をしばしば見下す。(原文英語)

2) 経済的な低さ、少数の犯罪

例5の記述の2、例7の2に見られるように、日本人が「一部の少数の人の行動を見て、全体もそうだと判断する」という心理機制を用いている(仮説:少数者の法則)。例6の2のように、経済的な低さを決めつけ、差別的な扱いを受けるのも、おそらく経済的に低い少数の外国人のふるまいを全体の判断に使ったと思われる。東南アジア

系であり、色が黒いことも関係するだろう。

例6 A大学 23才 女性 4年6ヵ月 A国(東南アジア)、B人(地域)

- 1 Aにはじめてきたとき、ある日本の方に家具などもらった。中古でも非常に助かった。
- 2 店で買い物をしたときに店員さんに変な目で見られたのはよくある(少なくとも無視される)。ちょっといいものなら(1万円の靴とか)試してはいけない。サンダル(ただの2000円のサンダルだよ!)を買うとしたとき、おじさんの店員さんに「あなたはこんなもの買えないから」と言われた。香水を買ったときに店員さんは無口で、全然ありがとうといわなかった。ただの店員のくせに!!

3 A人

- 4 意見:私の日本での滞在の期間はほんの少ししか残っていない。振り返ってみれば、楽しい、つらいことはいろいろあったが、残念なことに、その楽しい部分に日本人がほとんどいないことだ。日本人の友達を作る夢を見ながらAにやってきたので、最初は寂しくてがっかりしたけど、他の留学生や、他の地域での同国同士の友達、先輩を見ると、同じ事を経験して、「別にこっちが悪いからじゃない」と思った。私を本当の人間、個人として認めてくれない。私は、ときどき日本人に疲れて飽きたことがある。(原文日本語)

例7 B大学 26才 女性 4年

- 1 日本人の残業があまり多くて仕事以外は楽しいことがないみたい。
- 2 たとえばある部分中国人はよくない(法律違反)事をやった。そして、ある日本人は全部中国人がよくないという結論を出してしまいます。
- 3 中国人 (原文中国語)

3) 子ども扱いと欧米系への興奮

例8の2のように、相手を子ども扱いする場合があるし、例8の4のように、軽蔑的コメントをする場合がある。興奮が起こるのは、例9の2のように欧米系の留学生に対してである。

例8 B大学 31才 男性 2年7ヵ月 B国、ラテンアメリカン

- 2 日本人は、外人は何も日本で自分自身で出来ないと思いがちで、それ故、彼らは助けなければと感じる。助けることはOKだが、

彼らが、「あなたが自分で出来ないと思うから助けましょう」とアナウンスする事実を除けばだ。これはとてもわずらわしい。

3 ラテンアメリカ人

- 4 意見 もし日本人が外人と関係したければ、プレゼントをしたり、外人のためにパーティを開いたりだけでは十分でなく、「カラーテレビがありますか」のような質問をしたり、外人を助けようとしたり、彼を助けなければと皆に話したりだけでは十分ではない。いいえ！！外人と関係することは、実際、真に外国文化に関心を持ち、本を読み、コミュニケーションしようと試み、理解し、ほかの民俗（フォーク）の習慣に尊敬を持つことだ。それらをおもしろがることなく、また、冷たい、軽蔑的な質問をせず、日本と多くの国を比較することをやめるようにすると良い。一般的に、日本人は、より広い思考の仕方を持つべきだ。私は、文化的なトピックが話されない限り、日本人といることは好きだ。なぜなら、大体は、彼らは私の国について、私が軽蔑されたと感じるようなコメントをするからだ。私の気持ちを表現するこの機会を与えてくれてありがとう。（原文英語）

例9 B大学 25才 男性 9ヵ月

- 2 ときどき、私は、人々が外人（たとえば、私が誰かの家を訪問したとき）が近くに存在していると、過度に興奮するように感じます。それでは人生をストレスフルにしてしまうでしょう。
- 3 ヨーロッパ人（原文英語）

4) アジアへの関心と、アジアへの反省

例10の4で、日本がアジアに関心を向けたことをうれしく思い、例11の1、例12の1のように日本人が過去の重荷を背負いつつそれを認めないと感じている。

例10 I大学 26才 男性 2年 台湾

- 3 台湾的中国人
- 4 感想 日本人がアジアに対しての関心を示したところと、アジア系の人々と親しくなろうとしているところを、うれしく感じる。世界は永遠に変化している。いつも強盛である国はない。今から日本は、胸を広げて自国より弱い国を受け入れ、またそれを援助していただきたい。日本はよくなれ、アジアはよくなれ。（原文中国語）

例11 J大学 27才 女子 4年6ヵ月

- 1 過去歴史について確実に認めたくない日本人の姿を見ると。どうしても認めたくない日本人の姿を見ると日本人ではないのがものすごく安心だ。初めて会う人なら計算的な考えで親切だが、親しいだと思った人から冷たい感じをよく感じた。日本人は決して心を開けない性格。
- 2 他民族と会うのと違い、日本人と会うときは常に神経を使いながら、できるだけ私の民族の短所等をさけて、話し合う。（原文ハンブル）

例12 D大学 33才男性 9年6ヵ月

- 1 第二次世界大戦による歴史の重荷を負わなくてすむこと。
- 2 なし
- 3 抑圧された民族歴史を持つアジア人
- 4 とくになし。（原文日本語）

5) 入管、試験場などの待遇

例13の2、例14の2では、行政機関のひどい待遇が強調されている。

例13 A大学 30才男性 2年1ヵ月 台湾
台湾漢族

- 1 要するに留学生であるという身分で多少優遇されているが、むしろ日本語をうまく操ることが出来ると日本人とのつきあいは難しくない。
- 2 運転免許を切り換えたとき、自動車試験場の担当が悪かった。ちゃんと台湾の免許を持ち、日本の免許書の切り換え要項に従っていたが、やはりよっぽどひどい態度、ひどい要求があった。
- 3 台湾人（原文日本語）

例14 K大学 41才 男性 5年10ヵ月

- 1 空白
- 2 入国管理局の担当者の日本人に対する態度と外国人に対する態度は完全に違う

6) 対人関係のズレ

例15の2では、自分一人が笑えないという孤立感、例18の2では挨拶や声かけがされない孤独感を示している。この種の話しは事例においても非常に多い。例17の2では、アルコールの習慣の違いが誤解を生んでいる懸念を示している。一方で例16の1のように逆に行く人もいる。

例15 H大学 23才女性

- 2 日本人がみんな笑えるのに自分がおもしろ

さを感じない。私という一人の人間を見ず、いつも中国の名札をつけられてみられること。全く日本語の問題ではないと思います。(原文日本語)

例16 A大学 25才男性 6年6ヵ月 インドネシア ジャワ族

- 1 集まりの中心になれたことです。それが自分にとって、リーダーシップ的な面で非常にプラスになるはずです。
- 2 「自国」が多様多様にも関わらず、日本人は「自国」を均一国家とみなした。「自国」のマイナス面がそのまま私に当てはめることです。
- 3 インドネシア人
- 4 意見：私はよく移動してきた人です。同じ地方（もちろんそこでは民族があるので）にすむのは、長くて5年でした。それに比べて来日してもう7年になりました。ですから、あまり民族的な「違和感」などが全くないのです。(原文日本語)

例17 B大学 33才 男性 3年7ヵ月

- 1 モスLEMなので、私は、家庭経済、行動、健康にとってもっとも破壊的なものの一つであるアルコールを飲まない。
- 2 アルコールを同僚、スーパーヴァイザー達と飲まないことは、彼らには、私が友人になりたくないことを意味するが、それは真実ではない。
- 3 ファラオオリジンの アラビックモスLEM (原文英語)

例18 E大学 29才男性 5年6ヵ月 米国コーカシアン

- 1 日本に来てからの最初の2-3年間、小さな外語学校で働いていた。そのころ友達が出来て毎週末、居酒屋飲みに行ったりしていた。皆が日本語でほくに話してくれたから、中に入れてくれたという感じがした。
- 2 E大学に入学した直後、ぼくはよくスポーツ場に行ってバスケットをやっていた。しかし、バスケット連中を道かどこかで見て、ぼくが挨拶しても、向こうがやってくれない。そのために、スポーツ場へ行くのを止めた。もう一つ、入学した後、同級生がほとんど声をかけてくれなかった。そして、声をかけてくれても、白い外国人がめずらしいためか、いつも英語で話してきた。いったいどうして日本語能力試験合格しても日本語で話してくれない？向こうは日本語で

話してくれないと僕は内には入れない。

3 米国人

- 4 意見：私は在日韓国人と結婚している。現在深い関係は彼女だけ。私は同級生より10年年上だから、年齢の問題かもしれないが、大学に通っているのに、日本人の友達はまだいない（全くいないまでいえるかな）ということがあるから、日本人に対してよい意見を持つのも大変難しい。(原文日本語)

例19 A大学 26才 男性 1年11ヵ月 中国漢民族

- 1 私は1年半の間研究生をしている。前の半年間は、私に対して尊敬をしていた。しかし、彼ら（学生）がM1になってからは、私に対する態度は変わった。同じ人に態度が変わるなんて、我が国では「小人」という。
- 2 同じ研究室の日本人学生と食事をしないから悪いといわれた。
- 3 中国人 (原文中国語)

7) 文化のズレをよい体験と感じる

例20 O大学 20-30才女性 3年マレーシアン、チャイニーズ

- 1 何人かの日本人は外人に対しとてもやさしい。彼らは、我々のミスティクを受けとめうる。たとえば、年上の誰かと話しているときに、ミスティクをすると、だいたいは許される。
- 2 私がO大学にちょうど来た頃、数人の日本人学生と嫌な思いをした。身体的訓練のクラスの一つの時間に、日本人は、彼ら自身の間でプレイすることを好んだ。
- 3 チャイニーズマレーシアン (原文英語)

8) 欧米コンプレクスとアジア系

日本人が欧米人の人、英語を話す人には一目置き、尊敬する傾向が多くの人から語られる。その逆もしかりである。

例21 A大学 25才 男性 2年 レバノン、アラブ

- 1 多くの日本人がアメリカ人やヨーロッパ人に劣等感のコンプレクスを持っているために、私の言語能力と、身体的な外面から、日本人にとってもよくしてもらった。
- 2 不幸なことに、私が日本人に自分がアラブだと言うと、彼らの態度が変わる。
- 3 わたしは、ヨーロッパ志向の教育を受けた

アラブです（原文英語）

例22 E大学 27才 女性 1年8ヵ月 台湾
中華民族（漢民族）

- 1 外国人だから不動産屋さんの態度がすごく悪かった。友達がJRの切符売り場で下手な日本語で軽蔑された。その後、英語を使ったらJRの人の態度が改まって礼儀正しくなった。日本人はやはり欧米人にあこがれを持っていると思った。（3，4省略）（原文日本語）

例23 B大学 22才 女性 3ヵ月 アメリカン
インド人（エイジアンアメリカン）
（中略）

- 2 いくつかのケースで、私は真のアメリカ人とは見なされていないと分かった。なぜなら私はブロンド、青い目の白人ではないから。（以下省略）（原文英語）

（5）自由記述と事例からの考察

1）二者的言説

これらのプロトコルの意味の脈絡を検討せねばならない。事例には現れて、自由記述には現れないことがある。例えば、トラブルのプロセスについては、事例には事欠かない。「100のトラブル」の例では、現実の仕組みとのズレが、被害感、トラブルの道筋であることが多い（100のトラブル解決マニュアル調査研究グループ1996）。入国管理局の様々な規制（保証人、資格外活動許可など）、大学の様々な仕組み（奨学金、単位不足など）は、わかりにくいこともある。それらの仕組みを理解していないことで、様々なトラブルの元となる。留学生関係者も、それらを理解していない場合も多く、そのためにこのようなマニュアルに価値があるのである。「現実の仕組みの知識からの距離が遠い人ほど、トラブルになりやすく、トラブルになるまで仕組みを理解し得ない」（仮説）。

こうしたプロセスが自由記述で出てこないのは、二者関係的な言説であること、限られた質問による回答であることから思われる。自由記述は、匿名の調査者に対して、ストレートな感情を出しやすい。また、調査者がすべてを受けとめてくれるという期待を持つこともある。多くの意見があったように、建設的な結果を期待する人が多かった。我々調査者は、彼らにとって建設的な方向に問題を提起する責務があるとも言える。

2）エスニックなよい体験

例10は日本人がアジアに関心を向けてくれたこ

とを喜び、例1，例2，例3，例4，例5は自分のエスニシティに関心を向けてくれることをよい体験と感じている。これは、質問紙全体の内容（エスニックな良い体験についての質問）から賦活されたのであろう。ここに語られるのは、日本人がコンテインして、良いものを返す場合だけではない。日本人がコンテインしきれず、過去を否認していると、例11，12の留学生は見ている。

3）対人関係のズレ

対人関係のズレに関しては、自由記述に多数上げられていた。そこで、それらの脈絡を解釈してみたい。例18の背景として、年齢が上の人とは日本人が仲良くしようとしなない、という解釈が可能である。挨拶の仕方のズレ、例えば、おじぎと目を合わさないしぐさなどの文化的なズレが関係している可能性もある。例18の場合は、彼に相談する人が居たら、聞き役になるだけで状況が変わった可能性も感じられる。また、例19は、院生か研究生かで格が決まる文化（先輩後輩の上下のきびしい文化）に、文化ショックを感じていると思われる。また、例18は、日本人が個人主義的な側面を示す場合のショックと見ることもできる。これらは、対話をしてみないとこれ以上は分からない。

ここで、再び事例に目を転じてみる。事例でしばしば見られるが、例えば「アパートでだけでも日本人が話しかけてくれない、母国では、学生の住むアパートにはぎやかで楽しいのに」という言説がある。これらの背景としては、「日本人は、集団主義と個人主義が混合していて、使い分けている」（仮説）ということが考えられる。サークル、クラスなどの場における集団主義と、個人の生活における個人主義の使い分けである。

ここに社会人類学の古典である中根（1972）の図（p100-101）を引用する。日本文化は、家族成員が群をなして、各部屋のしきりが弱いとされる。これは、会社の中などでも同じような構造をなしてきた。これに対して、移行期にあるともいえる日本においては、日本式とイギリス式が混合し、混乱しているとみることが出来るかも知れない。そのアパートでは、学生たちが一人のスペースを守り、隣人と挨拶もせず、インド・イタリア式のような共有スペースもないと考えられる。日本人の心の中においても、イギリス型と日本型の使い分けに苦慮することもあると考えられる。

ミスを許されることの体験をした例20の人は、中村（1997）に紹介したように、ミスを許されないマレー、インドネシア系の文化と、いさぎよく

謝ればミスを許される日本の文化の差を体験したのであろう。

このように、多くの人は、「文化、慣習のズレ、意味の文脈の違いを、被害的に受け取り、相手との関係を切る」という心のプロセスをたどるが、人によっては、文化のズレがよい体験であることもある。これらは、必ずしも意味の文脈の違いというものを理解していない状況で進んでいる。

4) アジア系と欧米系

さらにこれらのプロトコルで明らかになるのは、一部の日本人がアジア人と欧米人を区別し、英語を使ったとたん態度が変わることがあることである。いわば近代化した国とその他を分割 (Splitting) する態度である。これらは近代日本の歴史がたどったプロセスとしてとらえることができる。

5. 考 察

質的研究の重要性を示し、その様々な記載方法を検討し、解釈と解釈のずらしを試みた。我々は、エスノグラフィー、インタビューにおける対話そのものの記述の重要性を主張し、対話の中で物語が生成していること、質問者とのやりとりの分析が重要であり、解釈の意味の脈絡の検討が必要であることを述べてきた。

心理学の扱うべき対象は、はじめに述べたように、より拡大するべき時が来ている。本稿では、質問紙、自由記述、インタビュー、事例などの異なった水準の言説を比較する試みを行った。これらは、広い意味で対話、メッセージとして理解することができた。

匿名の自由記述には、サンプルの代表性の利点がある一方、質問が限られること、ストレートな

言説が多くなり、背景の意味の脈絡までは聞き出せないことなどの特徴が見られる。取材としてのインタビュー法や、それらを用いたエスノグラフィーでは、より対話自体が解釈や概念を生成している現場をとらえることが出来る特徴がある。事例では、実際の社会との接点での様々な葛藤をとらえることが出来る一方、印象的な少数の人のことを中心に描く可能性を否定できない。また、事例では、多くの場合、対話自体をとらえられないでいる。面接をどう記憶再生させるかという問題ともつながるであろう。

これらの質的研究は、当然、統計的、量的な研究と相互補完的な働きをする。双方を有機的に用いることが必要であろう。

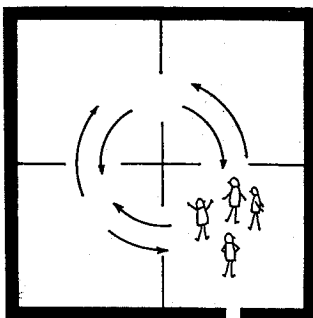
シンガポールの例、朝鮮学校中学生の例、留学生の例から見られるように、これらの質的な研究においては、公共圏のテーマが現れてくる。我々のインタビュー、自由記述からは、さまざまな現代日本の問題点、文化接触の葛藤についての言説、物語が見られた。さらにアジアに対する差別、分割などが背景に見えかくれる。これらのテーマに避けることなく、まさに心のプロセスの問題として取り組むことが必要である。このテーマに、心理学、精神医学において取り組んだ例として、野田正彰 (1998) の元軍人へのインタビュー調査がみられる。今後、対話を含めたプロトコル分析の手法、日記などのドキュメント分析、映像分析などを使った質的研究が期待される。

インタビューを、現実の聞き取りとしてだけではなく、対話による物語の生成として分析することを筆者は主張した。また、エスノグラフィー、インタビューは、語る人の解釈を、さらに我々が解釈するという営みがあること、矛盾や葛藤、感情などを相手に語るとき、その相手にコンテイン

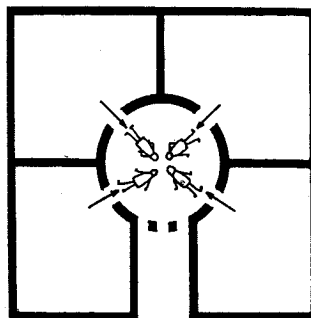
図1 家族成員の配置と動き方

中根 (1972) より

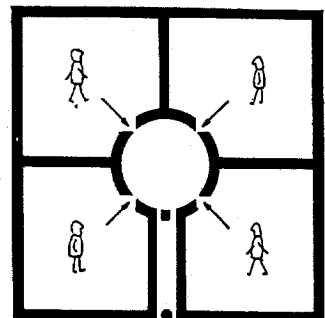
●日本式



●インド・イタリア式



●イギリス式



(包容)する力を期待していることを指摘した。対話のプロトコルそのものを、反証可能性の場に公表し、プロトコル、対話の中で起こっている生成をとらえ、何が本質的な動きなのかを解明していく土壌を作ることが必要である。

現象学的、臨床的な質的研究はいうにおよばず、認知心理学や発達心理学の領域でも、発話と行動そのもののプロトコル分析が重要になりつつある。エリクソンとサイモン (1984) は、プロトコル分析の方法を改めて確立し、海保、原田 (1993) は、

エスノメソドロロジーにおける会話分析の方法をも、プロトコル分析という枠の中にとりいれて論じたことで画期的であった。

ある意味では、ヴントがはじめようとしたこと (高橋 1994) を、現代の心理学者が再び取り上げはじめたという事もできる。文化人類学から広まったエスノグラフィと、心理学に元々あるインタビュー法の知見を生かして、さらに質的研究を発展させなければならない。

謝 辞

本稿の作成に当たって、共同研究者であった、榎栄根先生、川本ひとみ先生、平直樹先生、山崎瑞紀先生、横山剛先生、横山恭子先生、宗中正先生、およびインタビューに答えていただいた方々に心より御礼申し上げます。

引用文献

- Arikawa, T. 1993 *Grappling with a new culture: Dynamic courses of action and cognition of Indonesian University Students in Japan*. Ph. D. thesis, Urbana, Illinois
- 有川友子 1996 異文化的状況における人間の認知と行動 日本人とインドネシア人留学生の関係から考える 異文化間教育学会 第17回大会発表抄録 56-57
- 浅野慎一 1997 日本で学ぶアジア系外国人 研修生・留学生・就学生の生活と文化変容 大学教育出版
- Bion, Wilfred R., 1961 *Experiences in groups* ビオン 対馬忠訳 グループアプローチ サイマル出版/池田数好訳 集団精神療法の基礎 岩崎学術出版
- Cliford, James & Marcus, George E., 1986 *Writing Culture, the Poetics and Politics of Ethnography*, University of California Press, Ltd. 文化を書く 紀伊国屋書店 1996
- D'andrade, R. G. & Strauss, C. (ed.) 1992 *Human motives and cultural models*, Cambridge University Press.
- Denzin & Lincoln 1994 *Handbook of Qualitative Research*, Sage Publications
- Ericsson, K.A. & Simon, H.A. 1984 *Protocol analysis — Verbal reports as data*, Canbridge, MIT Press.
- 江崎泰子, 森口秀志 1988 「在日」外国人 35ヵ国100人が語る「日本と私」 晶文社
- 福本修 1991 ビオンのメタ心理学: その基礎と精神病論 精神分析研究 Vol.35, No.3, 200-212
- 福岡安則 1993 在日韓国・朝鮮人 若い世代のアイデンティティ 中公新書
- Geertz, C. 1973 *The interpretation of cultures*. ギャーツ 吉田禎吾, 柳川啓一, 中牧弘允, 板橋作美訳 文化の解釈学 I, II, 岩波現代選書, 1987
- グリンベルグ 1977 ビオン入門 高橋哲郎訳 岩崎学術出版1982
- 秦野悦子, やまだようこ著 1998 シリーズ発達と障害を探る1, コミュニケーションという謎 ミネルヴァ書房
- ハーバーマス 1990 公共性の構造転換 未来社 1994
- Harkness, Super, Keefer 1992 *Learning to be an American parent: how cultural models gain directive force*. In D'andrade, R. G. & Strauss, C. 1992 Ch 7.
- 星野命 1983 青年の異文化体験とナショナル・アイデンティティ 自叙伝と手記による考察 青年心理学研究会編 現代青年心理学 福村書店 7-26
- 100のトラブル解決マニュアル調査研究グループ 1996 異文化理解のための外国人留学生のトラブル解決マニュアル 凡人社
- 井上孝代 1996 異文化間カウンセリングにおける非言語的技法に関する実験臨床心理学的研究 平成6年度・7年度科学研究費補助金 (一般研究c) 研究成果報告書

- 井上孝代, 伊藤武彦 1995 来日一年目の留学生の異文化適応と健康 質問紙調査と異文化間カウンセリングの事例から 異文化間教育 9号, 128-142
- 井上孝代編 1997 a 異文化間臨床心理学序説 多賀出版
- 井上孝代編 1997 b 留学生の発達援助—不適応の実態と対応 多賀出版
- 岩男寿美子, 萩原滋 1978 在日留学生の対日イメージ(4) ケーススタディー 慶應義塾大学新聞研究所年報 11, 17-29
- 岩男寿美子, 萩原滋 1987 留学生が見た日本 10年目の魅力と批判 サイマル出版
- 岩男寿美子, 萩原滋 1988 a 日本で学ぶ留学生 社会心理学的分析 勁草書房
- 岩男寿美子, 萩原滋 1988 b 在日留学生の対日イメージ(10) 愉快・不愉快なできごとの分析 慶應義塾大学新聞研究所年報 30, 21-40
- 海保博之, 原田悦子編 1993 プロトコル分析入門 新曜社
- 柏木恵子, 北山忍, 東洋編 1997 文化心理学 理論と実証 東京大学出版会
- 金沢吉展 1992 異文化とつき合うための心理学 誠信書房
- Kim, U. & Yamaguchi (1994) Cross-Cultural Research Methodology and Approach: Implications for the advancement of Japanese social psychology 社会心理学研究, 第10巻第3号 168-179
- 北澤毅, 古賀正義編 1997 <社会>を読み解く技法 質的調査法への招待 福村出版
- 高鮮徹 在日済州島出身者の生活過程 関東地方を中心に 1996 新幹社
- 古賀正義 1997 参与観察法と多声法的エスノグラフィー 北澤, 古賀編 4章
- Langness L.L., Frank G. 1981 Lives: an anthropological approach to biography, Chandler & Sharp Publishers, Inc L.L.ラングネス, G.フランク 米山俊直 小林多寿子 訳 ライフヒストリー研究入門 伝記への人類学的アプローチ ミネルヴァ書房 1993
- Lifton R. J. 1961 Thought Reform and the psychology of Totalism リフトン 小野泰博訳 思想改造の心理 誠信書房 1979
- Lifton R. J. 1967 Death in life 死の内の生命 ヒロシマの生存者 1971 朝日新聞社
- Malinowski B. 1967 A Diary in the Strict Sense of the Term, by A.V. Malinowska マリノフスキー 谷口訳, マリノフスキー日記 1987 平凡社
- 箕浦康子 1991 子供の異文化体験 思索社
- 中根千枝 1972 適応の条件 講談社新書
- 中村俊哉 1989 精神分析学と集団力学 集団経験と理論化 上智大学臨床心理研究 13巻 231-240
- 中村俊哉, 慎栄根, 平直樹, 川本ひとみ, 高田夏子, 横山恭子 1992 在日朝鮮人学校中学生の異文化接触体験と意識 安田生命社会事業団研究助成論文集 通巻第27号 No.2 73-84
- 中村俊哉, 慎栄根, 平直樹, 川本ひとみ, 高田夏子, 横山恭子 1994 在日朝鮮人学校の中学生の異文化接触体験 教育心理学研究12巻第3号 48-54
- 中村俊哉 1997 アジア地域における企業内多文化接触の心理学的研究 (シンガポール) 福岡発・アジア研究報告 Vol.6-No.1 23-39 財団法人アジア太平洋センター
- 西阪仰 1992 エスノメソドロジストは, どういうわけで会話分析を行うようになったか 好井編 2章
- 野田正彰 1998 戦争と罪責 岩波書店
- 大橋敏子, 近藤祐一, 秦喜美恵, 堀江学, 横田雅弘 1992 外国人留学生とのコミュニケーションハンドブック トラブルから学ぶ異文化理解 アルク
- 奥田道大, 田嶋淳子 1991 池袋のアジア系外国人 社会学的実態報告 めこん
- リー, ガオンカル, 酒井 1996 カルチュラルスタディーズの現在 思想1996年1月号 カルチュラルスタディーズ 新しい文化批判のために 108-138 岩波書店
- Riesman, Paul 1970 Freedom in Fulani Social Life: An Introspective Ethnography. Chicago: The University of Chicago Press.
- 佐伯胖 1986 認知科学の方法 認知科学選書10 東京大学出版会
- 桜井厚 1992 会話における語りの位相 会話分析からライフヒストリーへ 好井編 1992 3章
- 佐藤郁哉 1984 暴走族のエスノグラフィー 新曜社
- 鈴木一代, 藤原喜悦 1992 国際家族の異文化適応・文化的アイデンティティに関する研究方法についての一考察 東和大学紀要, 18, 99-112
- 鈴木一代, 藤原喜悦 1993 国際児の文化的アイデンティティ形成についての事例的研究 東和大学紀要, 19, 123-136

- 鈴木一代, 藤原喜悦 1994 国際家族の子供の教育についての考え方 東和大学紀要, 20, 183-194
- 鈴木一代, 藤原喜悦 1995 国際家族の子供の教育についての考え方 父親の場合について 東和大学紀要, 21, 183-198
- 鈴木康明, 堀洋道, 井上孝代 1995 異文化間カウンセリングにおけるカウンセラーの役割に関する研究 外国人留学生を対象とする事例から 教育相談研究 33, 17-24, 1995
- 鈴木康明, 井上孝代 1996 a 異文化間カウンセリングの技法 井上孝代 異文化間カウンセリングにおける非言語的技法に関する実験臨床心理学的研究 平成6年度・7年度科学研究費補助金(一般研究c) 研究成果報告書 10-29
- 鈴木康明, 井上孝代 1996 b 異文化間カウンセリングにおける芸術療法 外国人留学生に対する箱庭療法とコラージュ療法 文化とこころ 多文化間精神医学研究 Vol.1 No.2, 57-64
- 高橋滯子 1994 実験心理学の独立 ヴント 梅本, 大山編 心理学史への招待 サイエンス社 7章
- 高松里 1994 「多文化間カウンセリング」における諸事例と援助方法 日本心理臨床学会 第13回大会発表論文集 152-153
- 高松里 1995 カルチャーショックと「被害感」在日留学生の事例を通して 日本心理臨床学会 第14回大会発表論文集 124-125
- 高岡哲夫 留学生いろいろ 大阪教育大学留学生指導センター年報 留学生教育 第4号 1996 6-22
- 矢永由里子 1994 異文化間カウンセリング 在日外国人への援助 心理臨床 7(2):91-97
- 山崎瑞紀 1993 アジア系留学生の対日態度の形成要因に関する研究 心理学研究, 64, 215-223
- 山崎瑞紀 1994 アジア系就学生の対日イメージ形成に関する因果モデルの検討 教育心理学研究, 42, 442-447
- 山崎瑞紀, 平直樹, 中村俊哉, 横山剛 アジア系留学生の対日態度及び対異文化態度形成におけるエスニシティの役割
- 好井裕明編 1992 エスノメソドロロジーの現実 世界思想社